

- ① 08 中垣のとなりの花の散る見てもつらきは春のあらしなりけり 樋口一葉
- ② 14 「君死にたまふことなかれ」 与謝野晶子
- ③ 31 頑強なる抵抗をせし敵陣に泥にまみれしリーダーがありぬ 渡辺直己
- ④ 50 水のへに到り得し手をうち重ねいづれが先に死にし母と子 竹山広
- ⑤ 51 「捕虜の死」 窪田空穂

- ① 冬ながら春のとなりの近ければ中垣よりぞ花は散りける 清原深養父「古今和歌集」
今朝そ見る春をとなりの中垣に衣かけほしさける卯花 正徹「草根集」

② 与謝野晶子『白桜集』（昭和十七年）

水軍の大尉となりて我が四郎み軍に往く猛く戦へ

子が船の黒潮越えて戦はん日も甲斐なしや病ひする母

戦いくさある太平洋の西南を思ひてわれは寒き夜を泣く

「与謝野晶子」Wikipediaより

この騒動のため晶子は「嫌戦の歌人」という印象が強いが、1910年（明治43年）に発生した第六潜水艇の沈没事故の際には、「海底の水の明りにしたためし永き別れのますら男の文」等約十篇の歌を詠み、第一次世界大戦の折は『戦争』という詩のなかで、「いまは戦ふ時である／戦嫌ひのわたしさへ／今日此頃は気が昂る」と極めて勗戦的な戦争賛美の歌を作っている。満州事変勃発以降は、戦時体制・翼賛体制が強化されたことを勘案しても、満州国成立を容認・擁護し、1942年（昭和17年）に発表した『白桜集』で、以前の歌「君死にたまふことなかれ」とは正反対に、戦争を美化し、鼓舞する歌を作った。例えば、「強きかな天を恐れず地に恥ぢぬ戦をすなますらたけをは」や、海軍大尉として出征する四男に対して詠んだ『君死にたまふことなかれ』とは正反対の意味となる「水軍の大尉となりてわが四郎み軍にゆくたく戦へ」など。このようなことから、反戦家としては一貫性がなかった。

③ 米田利昭『戦争と歌人』

私は、これらの歌のイメージがどこから来ているかというところ、それは、直接に映画「西部戦線異状なし」だと思う。だいたいこれらの歌のイメージは塹壕戦のそれであって、いま渡辺らの聯隊の一部が出勤している山西省の山岳戦のイメージでもないし、のちに渡辺が体験する北支平原の追撃戦とも、ゲリラ掃討ともちがう（…）

④ 【改作例】 ×水のへに到り得し手をうち重ね寄り添うやうに死にし母と子

⑤ 素朴なるよろこび（窪田空穂『鏡葉』大正十五年）

正月の三日といふ今日、三人子を連れて家いで、神楽坂の洋食屋にて、いささかの物を食はしぬ、十八となれる兄の子、大人びてフォークを執れば、八つとなれる末の暴れ子、取り澄まし顔よごし食ひ、十三となれる中の子、少女さびナイフ扱ふ、さりげなくそを見つつ食ふ、この肉の味のうまさよ、うまきやと問へばうなづく、三人子におのづと笑まれ、マチ摺りてつくる煙草の、ほのかにも口にしかをる、いざ行きてまじりはすべし、今日の大路に。

⑥ 太平洋戦争開戦の歌／歌人の戦争責任

斎藤茂吉「いきほひ」（未完歌集）

たたかひは始まりたりといふこゑを聞けばすなはち勝のとどろき
やみがたくたちあがりたる戦ひを利己^{りこ}傲慢^{ぼうまん}の国々よ見よ
何なれや心おごれる老大の耄碌^{もろく}国を撃ちてしやまむ

釈迢空『天地に宣る』（昭和十七年）

神怒り かくひたぶるにおはすなり。今し 断じて伐^うたざるべからず
洋^{フタ}の西 旧人国を破らむとす。いぎりすよ。あはれ。あめりかよ。あはれ。
東の文化は 常に 戦ひによりて興りぬ。伐ちてしやまむ

⑦ 「戦後75年」終わらぬ夏〈1〉「露宮の歌」にじむ哀感…作曲家・古関裕而の長男 古関正裕さん（「読売新聞」二〇二〇年八月一日朝刊）